

ローマ書連続講話 第3回 ローマ書 第7章～8章

2010年10月17日

奥田昌道

神様の本願 「無者」、己れが何も無い者 納得ということ その死に合うバプテスマ 自分は
二重人格 分裂だ キリスト我が内に在りて生くるなり（ガラテヤ書） 噫われ悩める人なる
かな キリスト・イエスに在る生命の御霊の法 御霊の愛 御霊の人 御霊なんじらの中に宿
り給わば 御霊の執り成し キリストに「お前、よくやったね！」と言ってほしい キリスト
へ丸投げ 祈り

●神様の本願

キリストがどういう人たちを大事になさっているか、どういう人たちがキリストの所へ
吸い寄せられるようにしてやって来たか。そういう、キリストと人達との出会い、結びつ
きが成り立っているのは、まことに「いと小さき者」なんです。

自分を何ものかとして、自分はサムシングだといって胸を張って、「おい、イエスよ」な
んてやっているのは全然だめなんです。ましてや、イエスさまのことを批判したり裁い
たり、そういうことをやっている者は全部、はねのけられています。それはどんな鉄砲の
弾も岩盤にぶつかったら、跳ね返されるのと一緒で、この岩にぶつかって躓いている。「妨
げの岩」「躓きの石」という、そういうキリストなんです。

ところが、どういう人が吸い寄せられているかという、まことに「いと小さき者」と
いうふうに自覚している人たちです。別の言葉で言いますと、

「あなたしかありません。あなたによつて顧みられ、あなたによつて生命づけられ、

あなたに^{すが}縋つて生きる以外に私はこの地上で生きるすべを知りません」

という、そういう魂の一番奥底からの叫び、それを持っていると、キリストはスーッと入
ってきてくださる。だから、私の気持ちからすればもっと更にこれを越えて、

「いと小さき者に宿り給う神」

と言いたい。宿つてくださる神です。

小さい子どもなんかに、「信仰だ、何だ」と言つたってそれは無理ですよ。でも、小さい
子どもの、無条件で何か平安である姿というのは、まことにその者の中に主イエス・キリ
ストの霊が宿つてくださっていると思えないという実感を私は懐く。「信仰があるか、
ないか」とか、そういうことではない。えてして、プロテスタント系の信仰というのは、「こ



ちら側の信仰」というものを物凄く強調する。

「あなたは信じてますか？ 信じていない？ だめですよ。

あなたは信じてますか？ 信じている？ いいですね」

とか。何か、「自分が信じている」という信仰を、「こちら側の信仰」を非常に強調する。私はそれは——間違いとまでは言いませんけれども——それはまだまだ「初めの段階」と言うかな、「信仰がなければ神に喜ばれない」とか書いてありますから。でも、そういうこちら側の信仰とか、こちらの側に根拠をもつようなものは、私は信用しない。こちらがどうであろうと、向こうのほうから、神様の側からグツと迫ってきて捕まえて、

「お前がどんなふうであっても、私は離しはしない」

と。親が本当の親なら、小さい子どもがどんなに駄々をこねようが、何しようが、グツとつかまえて、

「お前を絶対離しやしない。お前はお父さんの子じゃないか、お母さんの子じゃないか。お前を私はどんなことがあっても、幸せにするぞ」

と言って捕まえて離さないという、神様の側からの迫りです。

「ねじ伏せてでもお前をまともな者にするぞ」

という、そういう神様の側の熱心。これを小池先生は、

「本願」

という言葉で表されました。我々が、「かくあつてほしい。かくありたい」というのは、「悲願」という。神様のほうは本願という。そういう角度でキリストは、私たちに迫ってきてくださる。それに圧倒されるというか、気づいてくるというか、気づかして圧倒してくださる。

そうして身を任せる。私は「信仰」という言葉でなくて、「身をゆだねる」と言いたい。そういう角度です。神様に迫られ、愛に目覚めさせられて、「そうでしたか」と言つて、思わずその胸によりすぎる。胸に懷かれるように身をまかせる。そのようなものだと思うんですよ。だから、「信じる」とか、「信仰」とかいう言葉よりも、「身を任せる」というふうに受けとったほうが私にはしつくりくる。

それから、ローマ書の中に盛んに「罪」という言葉が出てきます。あまり日本人の我々にとつて「罪」という言葉はやはりしつくり来ない。皆さんはどうか知りませんよ。でも、私にはあまりしつくり来ない。それよりも、「罪」という言葉が出てきました時に、これを別な言葉で表すならば、「旧き我^{ふる}我」ということ。旧き我が「罪」なんです。聖書で「罪」というのは「旧き我」です。なぜかと言いますと、旧き我というのは自己執着、自分中心なんです。

「愛は素晴らしい」とか、日本でもよく愛の讃歌が言われますけれども。「愛は素晴らしい」と言つても、その「愛」はいったい何なんですかと、二人の関係で。異性との間の愛ということを考えましてもね。その愛とは何ですかといったら、結局、自分が相手を欲しいん



でしょ。自分にとって相手が役に立つから、それを自分のほうに引き寄せるという、自分なんですね。自分というものがあつて、そして、その中で相手を引っ張りこんで、「一緒に生きたい」という。何も相手を中心にして考えていない。自分が相手を引き寄せたい。捕まえてそばに置いておきたい。自分から出ている。

曾野綾子さんがかつて、

「その人のために死ねるか」

という問を発せられた。それが「はい」と言えたら本当の愛だと。そうでなかったら、それは自己中心の愛。美しくは見えているけれども、結局は罪の姿、自己中心なんです。自分のために世界はある、「二人のために世界はある」とかいふ。

でも、聖書の角度は、キリストの角度は全然違います。己を与える。キリストは神様中心です。

「神様の聖旨^{みむね}にかなうことならば、私は喜んで従います。私の己の意志というものは、神様の前では通用しません」

と言って、完全に神様のほうが主役であつて、自分はその光に照らされているお月さんみたいなもの。神様が太陽で、自分は太陽の光を受けて輝くお月さんのようなものだ。神様が在って自分が無いという、完全に自分中心ではない姿が「義」なんです。

「義」というのは、人間が義である姿というのは、新しく生まれ変わること。新しく生まれ変わって、新しい道を行く。「旧き我」に対して「新しき我」をいただいて、初めてこの義の世界、神様中心の世界に入っていく。これはもう神様中心です。

こういう対照が言われる。ローマ書をお読みになるときに、こういう角度で見えていけば、割合スーッと受けとつていける。そうでなくて、ローマ書で使っている言葉に囚われていると、なかなかきりきり舞いする。それが私の実感です。

●「無者」、己れが何も無い者

それから、ヨハネの福音書と非常に共通性があるということを時々、私は申し上げています。ヨハネの福音書はこんな理屈っぽいことは言わない。何を言っているか。

「ひと新たに生まれずば、神の国に入ることができない。神の国を見ることができない。」

と言ってましょ。「人新たに生まれる」という、新たに生まれる前は、「生まれながらの我」です。これではとうてい神様の次元のことはわからんよと。ニコデモさんは賢い人だったけど、ニコデモさんではだめだった。「人新たに生まれずば」と言われたら、

「へえ、年取ってからもう一度、お母さんのお腹の中へ入れるんですか!？」
なんて、そういうことを言つてましょ。そんなじゃない。

「天から、上から生まれなければ、どうにもならん」



「天から生まれる、上から生まれるとはどういうことですか？」

「風はおもいのまま吹く。どこから来てどこへ行くのかわからない。風が吹いているのは事実だ。でも、どこから来てどこへ行くのかわからない。人が新たに生まれるということは結局、神様が生み出してくださるということだ」

と。あのニコデモとの会話のあとにちゃんと、

「それ神は独子^{ひとりご}を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命の得んためなり」(ヨハネ3・16)

という有名な言葉が出てくる。その前に、

「モーセが荒野で蛇を挙げたように、人の子もまた挙げられなければならない」という言葉も出てくる。

そして、審判とは何か。光が来ているのに、人は光を憎んで、闇を愛した。光に背を向けて、闇の中へと逃げて行つた。これが審判になつている。光が届かない所が闇だ。光にクルツと背を向けているのが闇だ。闇が独自に存在するのではない。光が届かないように自分で壁をつくっている。それが闇だと言う。

どうしても旧き我というのは、そういうことになりがちなんです。

「光が来ても、光はちよつと眩しくて困ります、私に都合がわるい。私はあまりすべてを明らかにされると怖い。こつそりといろんなことをやりたい。また、やつていることを暴かれたくない」

と。人間の姿ですよ。ところが、それをヨハネ伝ではちゃんと、

「光が来たのに光に來ない。神様が審き給うのではない。自分で拒絶している。それは旧き我、自己執着、これを失いたくないからだ」

と。それをとことんやりぬいたのがパウロさんでしょ、信仰、宗教というレベルで。ローマ書では、9章からそのことが出てくる。義を追い求めたユダヤ人は、イスラエルはどう神様の義を得られなかった。なぜなのか、

「己^{おの}が熱心によつて追い求めたからだめだった」

ということがちゃんと出てくる。

宗教的な面でも、「己が熱心」というのは非常にあぶない。パウロさんみたいにキリスト者を迫害して、捕えてはエルサレム本山のユダヤ教の所へ連れて行くという役目をしていたんですから。それは実はキリストに逆らっていることになる。旧き我を維持したままて来た信仰なんて本当に困りますよ。旧き我のままで「信仰、信仰」と言いましたら、これは困る。

そしてまた、そういう方々にもまたいろいろな不思議なことが起こり得るんですよ。イエスさまに荒野の試みで、そういうふうにはサタンは誘つてきました。

「あなたは神の子だろ。神の子なら石をパンに変えられるだろ」



と。やろうと思つたら、できたと思います。塔の上に連れてきて、

「そこから飛び下りてごらん。『天使が支える』とちゃんと詩篇に出ている。

詩篇は神の言葉だろ。そこに出てきている」

「いや、神を試みるべからず」

と、キリストは言ってます。ですから、その気になれば、いろんな霊力的なわざは出てくるんです。そのままの姿で旧き私の延長上に変な信仰というのが加わって、そして熱烈にやりだしたときに、いろんな現象が起こって、人はどんどん集まってくる。しかし、それは恐ろしいことです。

キリストは全くちがう行き方です。キリストの行き方はどこまでもこちら(新しき我)です。キリストはヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、天が開けて聖霊が鳩のごとく降りてきた。

「これはわが悦ぶ者、わが心にかなう者」

という御言がきた。その時にはつきりと聖霊を受けられた。もちろん、キリストにはもう潜在的に聖霊が宿っていらつしやったから、あんな祈り深いお姿というのは、聖霊の導きなくしてはありえない。初めから聖霊によつて生まれられたお方ですから。けれども、自覚的に人にわかるような形で聖霊が降ってきたのはヨルダンのバプテスマです。その時に、

「私は自分を特別な人間とは思っていない」

と。みんなが悔い改めのバプテスマをヨハネから施されていた時に、

「私も同じだ」

と言われた。正に、いと小さき者の姿にキリストはなっている。それを小池先生は、

「無者」

と言われた。ナッシング、己れが何も無い者、何ものともしていない。その姿に神様が宿り給う。

私がここで「いと小さき者」と言うときは、そんな崇高な意味で言っているのではない。よるべなき者、寡婦やもめであるとか、孤児みなしごであるとか、病める者であるとか、いろんなこの世で見捨てられたような姿の人。そういう人にこそ神様は近くにおられる、ということをし上げたい。

ローマ書は結局、そういう「いと小さき者を顧みたまう」ということとはちよつと別次元ですけれども。ローマ書は、罪の問題、義の問題を正面から取り上げている。人間はどんなにじたばたしてみたって、「人新たに生まれなければ」この罪の姿からは逃れられない。その嘆きがローマ書7章です。そして、8章で勝利の凱歌が謳われているわけです。そういう構造になっています。



●納得ということ

ヨハネ福音書とローマ書を常に対比しながら読んでいかれると、とてもプラスになると思います。教えられることが多い。ヨハネはこんなふうな構造的に分析的に説明は一切していません。事実そのものを突きつけてくる。その事実というのは、単に人が甦ったとか、こんなことが起こったとかいう現象を問題にしていない。

「現象の奥にあるものをしつかり受けとりなさいよ」

ということを言っているから非常に深い。そういう深いヨハネの福音書の神学的構造と申しましょうか、それがローマ書できちつと解明されている。だから、ヨハネ福音書とローマ書、この二つを車の両輪として、新約聖書全体をご覧になっていけば、

「なるほど、なるほど。そうや」

ということになってくる。

「信仰」とかいうと、人はなにか一種独特なものだとも思うけれども、私はそうは思わない。非常に「ことわり」の世界、理の世界ですよ。私の専門は法律学ですけども、法律学は理に^{かな}適わない事、論理的に筋が通らない事は拒絶するんです。

「そうだ、それしかないわな、納得や」

という、これが我々の法律学の中でもそうだと私は思っている。納得ということ。信仰の世界もそうなんです、納得なんです。納得するものの前に人は頭^{こうべ}を垂れます。

納得しないものを押しつけられたら、あれはガリレオさんだったかな、「いや、それでも地球は動くんだ」と言っているわけです。拒んだら殺されますから、沈黙してますけれども、

「でも、地球は動くんだから、しょうがないわな。太陽はじつとしていて、地球が

動くんだ」

と。昔は太陽が地球の周りをグルグル回っているとする天動説だったから、地動説というものは弾圧されたわけですよ。「やつぱり、地球は動くんだもの、しょうがないわ」ということを言っている。それが正しかったというわけです。

真理の神様は理に合わないようなことは絶対に押し付け給わない。真理の前にはみな、「なるほど」と自ずと頭を垂れるという、そういう世界です。ですから、変な宗教というのは無理やり信じさせて、力づくで首に縄を付けて引っ張って行こうとするような変な宗教がはびこりますけれども。我々の求める世界は絶対にそうではない。

しかも、不思議ですよ。二千年前のことですよ。二千年前にキリストがいらして、そして御業をなさって言葉を語られた。それをいわば受け継いだパウロが、またいろんなローマの人たちやアジアの人たち、いろんな人たちに手紙という形で自分の信仰を告白した。時代も、場所も、風土も、全部我々の日本とは違う。やれ肉食系だ草食系だといろいろ言いますけれども、日本は実に草食系でありますし、あまりむごたらしいことはしない。そういう国民性があります。自然の中に育ってきて、自然に守られ、自然と共に生きている。



そういう民族と、それからこともあろうに、ユダヤというイスラエルは、動物を屠^{ほふ}つてそれを献げる。ことごとく動物を屠るわけです。キリストは屠^{こひつじ}られた羔^{こひつじ}になられた。だから、もうそのことだけでも、日本人は拒絶^{きえつ}反応^{はんぷう}を起こすのは当たり前なんです。性^{しょうじやう}に合^あわん。稲穂^{いすず}を献^{けん}げて、五十鈴川のお水で体を清めて、そして柏手^{かしわで}を打つという、こういうものが日本人にピッタリくるんですけれども。

「そんな血なまぐさい宗教はお断りだよ」

と。でも、聖旨^{せいしめい}によつてナザレにイエスという方がお生まれになった。その中に生まれて、天命と申しますか、宿命と言うか、それを受け入れて、屠られる羔として正に犠牲の宗教の犠牲そのものにキリストはなられた。犠牲はもう要らないと。犠牲はこれで終り。今や新しい世界が、霊界が開かれた。犠牲の宗教はあれで終りということをヘブル書でちゃんと証言している。キリストが犠牲の宗教に、自らの体を屠ることによつて、自らを犠牲にすることによつて止めを刺^{とど}して終った。

そして、あなた方は生命に生きる。新しい生命に生きる。民族がどうである、時代がどうであるということを越えて、誠に普遍的な、局所にとどまっていない本当に普遍的な、どこの国の人であろうと、またどういうバックグラウンドが歴史的にあると、それを乗り越えた所で私たちに生命を与えてくださる。これこそが全世界が待ち望んでいるところだと思います。

そういう真理というものは絶対に戦争をしない。宗教で争わない。真理は自らを現わしていくわけですから。

「これを守らないと、わが宗教はつぶれる」

なんて、そんな危機感^{ききかん}は全然ないわけです。自ずと真理は勝利していく。真理に逆らうものは自ずと亡びていく。真理にゆだねていくものは栄えていく。これが神様の道ですから。私はそれを本当に信じて疑わない。それでなかったら、この世界は生きるに価^あしない。ヒルティもそう言ってます、

「もし、この世がそういうものでないとしたら、生きるに価しない」

と。やはり旧約聖書からずっと貫いている一つの思想と申しますか、考え方というのは、「義人はなぜ苦しむのか。神を求めていた人は絶対、祝福されて幸せでなければいけないのに、なぜそういう人に——限つてというか、そういう人に往々にして——苦しい苦難な道が訪れてくるのか。気楽に、神に敵対するような生活をしているようなやつがどんどん繁栄して勝ち誇っている。そんなことがあっていいのですか!？」

と。それが詩篇によく出てきましたでしょ。

「悪をなして栄える者に心を悩ますな。彼らは瞬^{またた}く間に亡びるんだから」

と、詩篇73篇に謳^{うた}われています。やはり、人間の思いの中では、義しい者、神を求める者、



それは絶対に祝福されねばならないという。逆に、それに逆らう者、神様に逆らう悪をなす者は亡びなければならぬという、そういう思いが非常に強く出ているのにもかかわらず、現象面から見るとまるで逆のようなものが出てきますので、

「なにゆえ、義人が苦しむのか。悪人は栄えるのか」

というのがヨブ記の中にも出てきています。

それから、ヨハネ伝に出てきてます、生まれながらに目の見えない、物乞いしなければ生活できないような方を見て、

「これはこの人の罪ですか、親の罪ですか？」

と。人間はそれを聞きたくなるんですね。

「なんでやねん？ もしも、神様がいらつしやるなら、なんでこんな酷い目に合わせるねん？」

と、そういうのが人間の思いにあるわけです。それに対して、キリストは原因を問われなかった。

「この人の罪でもない。親の罪でもない。神様の御業がこの人の上に現れるためだ」

と、全く別の角度から答えておられる。私は、それは本当に素晴らしいと思っている。というのは、皆さんそれぞれに文句があるわけですよ。

「なんでこんな変な親から生まれたのか。自分の親は普通の親みたいになんとしてたことをやってくれへんのや？」

とか、それぞれに自分の境遇とか素性とか生い立ちとか、その他さまざまなことについて、つい人と比べると、自分だけがいつも損をしている。「なんでやねん？」という、いろんな不平不満、呻き、嘆き、人に言えない何かを背負っている。そうじゃないかと思う。まあそうじゃない方もいらつしやるかもしれないけれども、多くの方はそれぞれに自分自身について、あるいは自分と繋がりのある人たちのことで、いろんな荷物を背負っている。

「これさえなければ。これがなければ。あいつさえいなければ」

とか、いろんなことを思っているのではないですか。それで「なんでやねん？」と。その時に、「原因はこれである」と、いくらほじくりだしても、それで答えは出てこない。

「神様の御業が現れて、お前は全く新しくされる。もう旧き我、いろいろな諸々の因縁因果、そんなものは全部、十字架で亡ぼして、『視よ、一切は新しくなりたり』

と。十字架ですっかりそれを洗い流して、あなたに新しい世界を開いた。新しいあなたが生まれた。これから神様と一緒に新しい生命を築き上げていくんだ。さあ一緒にいこう」

と。こちらの新生の世界を差し出してくださっている。しかも、犠牲なくしてはなかった。屠られ給いし羔——我々の嫌な犠牲という——それを自ら引き受けて、それで「犠牲はこ



れで終り」という。……

だからすべて犠牲なくしては始まらない。キリストはそういう我々のさまざまなマイナス要因とか、我々を苦しめるさまざまな因縁因果、旧き世界と脈々とつながっている——御祓^{はら}いを受けて、呪いを取つてもらつて、ご祈禱をいただいたつて、それは一時的には何かあるかもありませんけれども、根源的な解決ではない——それを全部洗い流して、

「視よ、新しくなった」

という世界に我々を生かしてください。これはキリストの他にはないと、私は受けとっている。

そういう世界を展開してくれているのがローマ書ですので、ちょっと前置きが長くなつてしまいましたけれども、ローマ書の方にこれから参りたいと思います。

●その死に合うバプテスマ

まず、6章を見てください。3節から、

「³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。」

これは「水のバプテスマ」を指していますけれども、その水のバプテスマが表しているのは何かというと、キリストが死に給うた、その死に一緒に合わせられる、いわば「旧き我を葬るお葬式」を意味している。だから、「キリスト・イエスと合体する」、そのことによつて、キリストが十字架の上で亡くなられたように、自分もキリストと一緒にあの十字架の上で葬られている。お葬式を表している。「その死に合わせられた」と言つてましょ。キリストは死につばなしではなかった。神様の御力によつて甦^{よみがえ}られた。しかも、栄光の姿で甦^{よみがえ}れてこられた。

⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦^{よみがえ}えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。

とあります。何のための十字架であつたか。それはひとりでキリストが十字架にかかつて復活されて、我々とは無縁なことだったら、これは一人芝居である。一人芝居であつて、我々とは何の関わりもない。そうではなくて、あそこで起こつていたことは実は、皆さんに直に関わりのあることだ。我々はそばに居合わせなかった。いや、生まれてもいなかった。けれども、神様の目においては、のちのち生まれてくる者も、今まで生きてきた者も全部ひっくるめて、

「キリストよ、お前が背負うんだ。今までの人間たちの、これからの人間たちの運命をお前に託すから。これはお前しかできないことだ。お前は今まで私の言うことを全部、「ノー」と言つたことはなかった」



と。ことごとく「はい。はい」と言つて、神様の御意を百%行じてきた。これが「義人」なんです。つまり、自己執着がない。罪の執着がないわけです、イエスという方は。「わが心に叶う者」と言つて祝福されたお方で、しかも、サタンの誘惑を全部はねのけて、「神のみ、御言のみ」と言つて貫いていかれた。そういう素晴らしい——それだけでも義人ですよ——正に御意だけに生きてこられた、その義人に追い打ちをかけるように、

「お前はもうそれだけで本当はスーッと天国へ行けるにふさわしい者だけど、しかし、もう一つ頼みがある」

「はい、何でもございましょうか？」

「あいつらのために死んでやってくれ」

と。「あいつら」と言いたいですね、逆らっている者たちですから。逆らっている、その旧き我を背負いこんで、それがいろんな形で表れてくる現象です。マイナスの姿が現象的に表れてくるけど、本源はみなここからきている。

「これは、お前しか解決してくれる人はおらんだ。お前は今までよくやってくれた。それを更に深くやってくれ」

「はい、御意ならば、そういたします。御意は何でしょうか？」

「十字架にかかつて死んでほしい。私はお前を蹴飛ばす。お前を捨てる。それでも

よろしいか？」

酷い話ではないですか。こんなものが理にかなうものなのでしょうか。かないっこないですよ。

「自己責任」という言葉がある。近代法の論理で「自己責任」という、自分のやったことは自分で責任をとる。人が身代わりになるのはだめです。税金だって自分で払いなさい。刑罰だって自分でちゃんと受けなさい。親分に代わって自分が刑務所に入るのはあかん。自己責任でしょ。そこから言うと、

「罪の払う報酬は死なり」

で、死んで当たり前です。ローマ書にさつき出てきました。肉に従って生きるなら死の他ない。霊に従って生きるなら、永遠の生命である。霊に従って永遠の生命に至る。そこへ行くにはまず旧き我が葬られなければならない。これは自己責任で自分でできない。人間たちはみなそれで呻いている。

「自己責任でやれるかやれないか、やってみろ」

というのが律法というもの。律法というのは、神様の御意を具体的に文字に表したものです。「十誡」がそうです。十誡を更に具体化するさまざまな規範が出来上がってきた。それを本当にやるならば、祝福がある。これを踏みにじるなら、呪いがある。

あそこで言っている「祝福」は「永遠の生命」とは思っていない。幸せになる、たくさん収穫がある、たくさんの子宝に恵まれるという、現世的な祝福された姿です。それに



対して、呪いのほうは死ですね。病気で死ぬとか、いろいろなことで死んでしまう。私は「永遠の生命」のことはまだあそこでは言われていないと思う。

どっちにしても、神様の御意にかなう生き方をしていけば、祝福にあずかる。そうであれば呪いとなつて死に至る。この二つです。ところが、人は——7章で出てきますように——心の中では御意に従いたいと思うけれども、己というものがあつて自己執着で、神様の御意に従えない。反対のことをやつてしまう。どうにもならん。そこでキリストが現れてくださった。そういうことになつていくわけです。

ですから、さきほどの6章へ戻りますと、

「³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり」と。はつきりとここに目的も書かれています。

⁵我らキリストに接がれて、その死の状^{さま}にひとしくば、その復活^{よみがえり}にも等しかるべし。

キリストさまと合体させられた。そして旧き我は死んだ。甦つてくださったその中に私も抱かれて甦らされている。

⁶我らは知る、われらの旧き人、

ここに「旧き人」が出てきました。旧き我です。

キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体^{からだ}ほろびて、ここでの「体」というのは肉体のことです。

此ののち罪に事^{つか}えざらん為なるを。

パウロから見たら、この「体」というやつはけしからんですね。7章に行きますと、体の中に別の法があつて、別の法則が働いている。心では神様の法に従いたいと思つているのに、体の中に働いている罪の欲情——まあ肉欲なんかも入っているかもしれない——それが別のことを欲している。そこへ引きずり込んでいく。神の御意に従いたいということが無力化される。

「ああ、悩めるかな、この罪のからだ」と言う。

「霊によつて体の働きを殺すならば生きる。体の働きに無条件に委ねたら死ぬ」

と書いてある。そのぐらい、パウロにとって体というのが問題なんです。「問題だ」という言い方をしたのは、体そのものは神様からいただいたものです。これは聖なるはずなんです。聖なる体の中になぜ変なものが入りこんでいるのか。これが「罪」であると。罪という何か人格的なものがこの体の中に住み込んで、それが体をぎゅうじつて、心の法則



と戦いをやって、いつも負けてばかりおる。

「ああ、われ悩める人なるかな」

という嘆きが出てくる。ですから、7章を受けとるためには、6章を読んでおいたほうがわかり易いわけです。

⁶我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、
罪の体^{からだ}ほろびて、

無力化されて、

此ののち罪に事^{つか}えざらん為なるを。

死んだ者は罪より逃れる。ここに7章の一つのヒントが出てきます。死んだ者は罪からのがれる。死んだら罪というものははや、死人をどうすることもできない。

「死んでしまつたらいい。罪からのがれるには死ぬしかない」ということを言っている。

そして、私たちはキリストと一緒に死んだ。そしたらもう、罪というものは私たちを支配しない。そしてキリストは生きてくださったんだから、私も一緒に生きる。ここに死生の転換が起こっているではないかと。「そのことを私たちはよく知っている」ということを9節で言っています、

⁷そは死にし者は罪より脱るるなり。⁸我等もしキリストと共に死にしなければ、
また彼とともに活きんことを信ず。⁹キリスト死人の中より甦^{また}えりて復死に
給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。

だから、結論として、キリストが死んでくださったのは、罪との関係で死んでくださった。生きてくださっているのは、神様の中へと生きていく、新しい生命に生きていく。そういう角度から生きてくださる。私たちも同じだ。あなた方も罪というものの関わりではもう既に死んだもの。神様との関わりにおいては生きています。しかも、キリストの中で生きている。どこまでもキリストに在りて生きている。こういうふうにはつきりと自分に言い聞かせなさいと。そういうふうと言っているわけです。

¹⁰その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神
につきて活き給えるなり。¹¹斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたる
もの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思ふべし。」(ロ
マ6:3-11)

●自分は二重人格、分裂だ

そして今度は、7章へ行きます。

「兄弟よ、なんじら知らぬか、(われ律法を知る者に語る) 律法は人の生ける
間のみに主たるなり。²夫ある婦^{おんな}は律法によりて夫の生ける中は之に縛ら



る。然れど夫死なば夫の律法より解かるるなり。³されば夫の生ける中に他の人に適^ゆかば淫婦と称えらるれど、夫死なばその律法より解放さるる故に、他の人に適^ゆくとも淫婦とはならぬなり。⁴わが兄弟よ、斯くのごとく汝等もキリストの体により律法に就きて死にたり。これ他の者、すなわち死人の中より甦えらせられ給いし者に適^ゆき、神のために実を結ばん為なり。⁵われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢体のうちに働きて、死のために実を結ばせたり。⁶されど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の旧きによらず、霊の新しきに従いて事^{つか}うることを得るなり。

この7章の1節から6節はちよつとパウロさんは、あまり適当な例えではないように思いますが、これはいくら読んでみましても。というのは、言いたいことは、律法というのは人が生きている間だけ支配する。死んだ人間には、律法は無力になるんだということを言いたい。そして、十字架で私は死んだ。そうすると今まで「旧き我」を押さえこんでいた律法という、そのご主人が

「あいつは死んだのだから、もうどうしようもない。死んだはずの者がキリストの所へ行つて、死んだはずの人間が霊的にキリストの所へお嫁に行つて、キリストと一つとなつている」

と、律法という旧い主人がじただんだ踏んだつてもう遅いよ、ということを言いたい。そのことを言うために、この7章の1節からくどくどと律法のことを夫婦関係に例えて言っている。

この例えはあまりしつくりこない。なぜかと言いますと、まず律法というものは、人が生きている間だけ人を支配する。これはいいですね、人が死ねばその人をもう支配できない。そこまではいいんですけども、夫婦関係に照らしまして、夫が生きている間は、奥さんというのはその夫という律法に縛られて苦しんでいる。その夫が死んでくれたら、その人から解放されて、誰の所へ行つたつて、淫婦とは言われなですむんだと、そう言っている。待つてくださいよ。女は死んでどこかへ行くなら、これはもう死んだ人間は縛れないということで、さっきの話で律法だけが生きていて、こっちが死んだから、死んだ人間が今度、霊的にキリストの所へお嫁に行つたつてかまわない。もう旧い人間は死んでいるのだから。律法はどこまでも生きているわけです。

ところが、夫という律法から解放されるのは、夫が死んだからという。そこが合わないでしょ。夫という律法から解放される。奥さんが死んで、死んだ奥さんが霊的に甦つて別な人の所へ行くというなら、これはちゃんと辻褄が合うんですけど、夫が死んで、行くという。夫が死ねば、夫婦関係はそこで切れるわけです。夫婦関係というのは、二人での間の関係で、どっちが死んでも、もはや夫婦ではないんですから、そうすると自由ですよ。なにも律法



を引きずり出さなくても、法的にみても、夫婦関係というのは両方が生きている間のこと。だから、結婚式の司式の時に牧師さんがよく仰います。

「死が二人を引き裂くまでは、夫婦として守りたまえ」

と、平気で言いますものね、あのヨーロッパのほうの牧師さんは。

「死が二人を分かつまで一体となつて生きていくことができますようにお導きください」

と。日本の結婚式で「死」という言葉は絶対に使つてはいけない。そうでしょ。向こうではキリスト教会でやっていますから、平気で「死が二人を分かつまでは」と言ってます。

そういう、死が二人を分かつならば、律法も手出しできないという。

ですから、パウロさんは、ここで律法を引っぱりだしながら論証しようとしているのは、私から見たら失敗だなという感じがいたします。誰もそんなことを言わない。みんな、パウロさんは偉いと思いますからね。私は、どんなに読んでもこれは辻褄が合わない、ちよつと失敗だなと思う。

でも、言いたいことは、律法というご主人は生きておるんだけど、私のほうがキリストにおいて死にました。だからもう、律法というご主人は私に対しては手出しできない。妻ではなくなっているのだから。霊的な別人格になつて、そしてキリストという霊的な別人格、生きていらつしやるキリストに——肉体のキリストではない——霊なるキリスト、復活されたキリスト、そこへ我々も一緒にそつちへ行く。そういうことだけを言っている。

そして、7章4節、

4 わが兄弟よ、斯くのごとく汝等もキリストの体により律法に就きて死にたり。これ他の者、すなわち死人の中より甦えらせられ給いし者に適き、神のために実を結ばん為なり。

キリストの十字架を受けてくださった御体を通して、律法に対する関係では、あなたは死んだ状態だから、あのご復活のキリスト、霊なるキリスト、そのお方の所へお嫁に行つても、淫婦とは言われないし、むしろ、そこでこそ神様のための実を結ぶ。今までは肉の働きの中で結ぶ実がろくでもない実を結んでいた。

5 われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢体のうちに働きて、死のために実を結ばせたり。

肉に在りしとき、つまり旧き我だったときには、律法によつて罪が刺激されて、そして死のための実を結ばせた。ところが、今はこの律法という縛りから外されたものだ。

6 されど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の旧きによらず、霊の新しきに從いて事^{つか}うることを得るなり。

だから、我々は霊の新しきに從つていく。もはや、旧い律法によつて支配されるのではなくて、新しい御霊の法に從つて生きていく。



するとここで、「では、律法というのはとんでもない悪いやつなんですか？」という質問が出てきますので、それが7節からです。

7さらば何をか言わん、律法は罪なるか、決して然らず、律法に由らでは、われ罪を知らず、律法に『貪る勿れ』と言わずば、慳貪^{むさぼり}を知らざりき。

いや、律法そのものは聖なるものである。律法には罪はない。悪いのは、その律法が来たことによつて、私の中に潜んでいる罪がむくむくと起き上がつて、そして罪が支配して、私をがんだらめ^{だめ}にしている。この「罪」というのをまるで人格のように見ている。この「罪」という魔物が私を苦しめて来たんだと。こういうふう^{よう}に言う。

こういうことは私にはあまりピンとこない。皆さんはどうか知りませんが、律法が来なければ罪なんかも知らなかった。律法が「貪るな」と言うと、何か「貪りたくなる」と言う。ほんとかいなと思うんですけども。「貪るな」と言わなくても、貪る人間は貪っているでしょうし、貪りがあまり良くないことくらいは分かっているでしょうね。と思うんですけども、

「貪るなと言われなかったら貪りを知らなかった。しかしながら、この律法というものが私の内なる欲望を刺激して、貪りの心を起こさせたんだ」

と。だから、この律法というものが現れてくるまでは、罪はいわば潜在的にはあったけれども、眠っていた。ところが、寝た子^こを起こしてくれた、律法がね。それで自分の本性と

いうものが暴かれてしまったと、そういうことです。
8されど罪は機^{おもて}に乘^{のり}じ誠命^{せいめい}によりて各様の慳貪^{むさぼり}を我がうちに起せり、律法なくば罪は死にたるものなり。9われ曾^{かつ}て律法なくして生きたれど、誠命きたりし時に罪は生き、我は死にたり。10而して我は生命にいたるべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり。

私はかつて律法なくして生きていたけれども、誠命がやって来た時に罪が生き返つて私は殺された。では、聖なる律法が私を殺したのか。いやそうではない。罪というやつが私を殺した。罪を刺激したのが律法なのであつて、律法には罪がない。律法が悪いのではなくて、律法が来たことによつて、この罪というものがむくむくと甦^{よみがえ}つて生き返つて、そして私をいろんなマイナスへと導いていった。これが11節です。

11これ罪は機^{おもて}に乘^{のり}じ誠命^{せいめい}によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。
12それ律法は聖なり、誠命もまた聖にして正しく、かつ善なり。13されば善なるもの我に死となりたるか。決して然らず、罪は罪たることの現れんために、善なる者によりて我が内に死を来らせたるなり。これ誠命によりて罪^{はなは}の甚だしき悪とならん為なり。

だったら、善なるものが私にとつて死をもたらすことになるなら、善なるものはけしからんのか。律法自身も神様から出ている以上、霊的なものだ。ところが、その律法を肉



に受けとっている。受けとり手は旧き人ですから、その旧き人なりに理解している。旧き人は己の実力、欲求で

「律法を全うしてやろうじゃないか。神様が求めているならばやってやろうじゃないか」

と。まるで律法によって喧嘩を売られた人間が、その律法を全うして神様に「目にも物に見せてくれよう」という、そのくらいの行き方ですよ。パウロが正にそれで邁進したわけです。

「律法の義につきては責むべきところなし」

とパウロは自負しています。律法の義については私は誰にも負けない。そのくらいに律法に熱心であつたという。ところが、その熱心は肉からでた熱心だから、結果としては神様に逆らっていたわけです。

¹⁴ われら律法は霊なるものと知る、されど我は肉なる者にて罪の下に売られたり。

旧き我は肉なるもので、罪の下に売られていた。罪という一つの霊的な存在、それに捕えられていた。

以下へ行きますと、自分は心の中では善を望んでも、やっていることは逆なので、そうすると自分は二重人格、分裂だと。心の中では善きことを願いながら、やっていることは反対だ。言う事とやっている事は違うじゃないのということです。親御さんがあまり道德的なことを子どもさんに言うのと、子どもさんは親の姿を見ていて、

「お父ちゃん、言うことはいいけど、やっていることはなんや?」

ということになって、全然信用してもらえなくなりますよ(笑)。だからかえって、

「俺はだめおやじや」

と言っているほうが、子どもにとつてはいいわけですよ。だめおやじを乗り越えようと思つて、子どもは発奮してくれるから。ところが、親があまり一方的に道德的に教育をやりますと、子どもはかえって萎縮して、隠れた所で、親の目の届かない所で、いろんなマイナスをしでかすという。これは経験法則ですね。ですから、あまり親は立派すぎはいかん、立派すぎる姿を見せてはいかん。大学の先生とか、牧師さんとか、その他さまさまの、周囲から「先生」と呼ばれ尊敬される立場の人は、口では立派なことを言うわけですね。家庭の中でも立派なことを言う。「でも、やっていることは何なの?」となりますと、子どもにとつては良くないですね。

そういうことで、自分は思っている事とやっている事が違う。何でやねん?と。それは私の中に宿っている「罪」というやつが悪い。私自身は悪くない。なんか無責任です。私自身は無責任だ。罪というやつが私を捕えて、奴隷扱いにしている。しかも、勝とうと思つても勝てない。勝ちたいけども勝てない。負けてばかりいる。そういう悩みがある。

¹⁵ わが行うことは我しらず、我が欲する所は之をなさず、反つて我が憎むと



ころは之を為すなり。¹⁶ わが欲せぬ所を為すときは律法の善なるを認む。
¹⁷ 然れば之を行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。¹⁸ 我はわが中、すなわち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲すること我にあれど、之を行う事なければなり。¹⁹ わが欲する所の善は之をなさず、反って欲せぬ所の悪は之をなすなり。²⁰ 我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。²¹ 然れば善をなさんと欲する我に悪ありとの法を、われ見出せり。

それが22節に、

²² われ中なる人にては神の律法を悦べど、²³ わが肢体のうちに他の法ありて、
我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。²⁴ 噫
われ悩める人なるかな、

私はうちなる人としては神の律法を喜んでゐる。けれども、体の中に別の法が働いて、心の法則と戦って、そしてこの体の中にある罪の法則の下に虜としてゐる。ああわれ悩めるかなと。これは決して救われる前の姿ではなくて、救われてからの人間、死に至るまで同じ戦いがあるという永続的存在です。

だから、クリスチャンで本当に神様の、キリストの中に抱かれて、その中に自分の身を置いて生きているときには、「旧い我」というのは忘れてゐる、死んでゐるんですよ。ところが、この「新しい我」の姿を見失って、「旧い我」は——見えているのは「旧い我」です——肉体は相変わらず肉体として残っていますから、内的に変化が起こつていても、外側においては変化が起こつていない。しかも、肉体は肉体として依然として生き続けるわけです。そうしますと、私たちが新しく——さきほどの6章にありましたような——あの姿を忘れて、この世の生活に埋没しますと、いつのまにか「旧き我」の生活に戻つてしまう。そうしますと、こちらの「新しい我」のほうが無力化されてしまう。そういう我々はどこまでいっても、二重性、二重構造ということがあるんですよ。

●キリスト我が内に在りて生くるなり（ガラテヤ書）

そのことを分かつていただくためには、ガラテヤ書を見ていただきたい。ガラテヤ書がこの問題をまた徹底的に論じています。

ガラテヤの人たちは始め、パウロの福音を聞いた時に実に喜んだ。聖霊を受けて生き生きしていた。ところが、

「そんなの、お前の思い込みとちがうか。ただ信じて天国へ行けるなんて、ちょっとむしがよすぎるとちがうか？ 見てごらん、神様は律法というのを与えてある。これを行わないとあかんと書いてあるやろ。神様の言葉は永遠なんや」と言われて、



「そうかな？」

と、コロツと引っくり返った。苦勞しないで受けとったものは、そういうふうには手放してしまう。苦勞してたどり着いたものは絶対に失わない。だから、簡単に入学試験に合格して、特別入学させてもらったら、あぶないわけですよ。それなりのしつかりした実績を積みま

せんと。
ガラテヤの人は本当に素直に信じて、素直に聖霊を受けた。素直に喜んでいた。そこへ惑わす者たちがやってきて、引っくり返した。それに対してパウロは本当に嘆いた。

「彼らを躓かせた者たちは呪われよ」と、そこまで言ってます。

律法とこの福音とはどういう関係にあるかということを経テヤ書3章の15節から言っている。まずアブラハムに約束を賜って、それから430年経ってからモーセに十誡が与えられる。これが15節からの所です。では、430年後に現れた律法によって、始めのアブラハムの約束は無効になったのか。絶対そうじゃない。いうならば、アブラハムが約束を受けた。それから今度は、キリストが現れた。この中間に変なものが現れた。これが「律法」なんです。この中間に現れてきた律法というヘンテコなもの、これによってすっかりかき回されてしまった。人間は、アブラハムは神様を信じた。「はいっ」と言った。そして、神様は

「よし、それでいいんだよ。あなた方を受け入れてあげるから、その徴として割礼を受けなさい」

と。割礼は体の中に刻み込むわけですから、そうすると代々それを思いおこせば、「ああアブラハムのあの祝福」ということで、そこへ返っていきける。原点のアブラハムへ帰っていくために、体に割礼を受ける。そういう割礼だったんです。ところが、

「永遠の約束だ、永遠の契約だ。割礼を受けない者は民から除外される」

と言われる。そういう祝福の約束があつたにもかかわらず、途中でこの律法というものが入り込んできた。しかも、モーセは神様のお遣い（つか）いですよね。神様のお遣いとして讃えられるモーセを通して与えられたものだから、これ自体は聖なるものです。だから、みんなそれに従おうとした。けれども、その結果としては惨憺（さんたん）たることだった。そしたら、いったい律法というものは何のためだったのか、ということになってまいります。

そこで、このガラテヤ書では3章19節に、

「¹⁹然れば律法は何のためぞ。これ罪の為に加え給いしものにて、御使たちを

経て中保の手によりて立てられ、

この「中保」というのはモーセです。モーセの手によって立てられ、

約束を与えられたる裔（すえ）の来らん時にまで及ぶなり。

「約束を与えられたる裔」とはキリストのことです。このキリストが現れるまでの中間的な一つの規範として律法というものが与えられる。しかも、罪のために遣わされた。律法は、



罪の自覚をはっきりさせるために与えられたが、人はそうは思っていなかった。

「律法は聖なるもので、律法に従って生きるならば祝福を受ける。だから、律法を守ろう」

とやっているんだけど、それは神様の目から見たら、罪を暴きたてる、人間がいかに罪深いかということを暴きたてる役しかしなかったというわけです。

20 (中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在^{いま}せり) 21 さらば律法は神の約束に悖^{もと}るか、決して然らず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、実に義とせらるるは律法に由りしならん。

では、律法は——神様の約束ですね、アブラハムに対してはこれは約束、祝福の約束です——この始めの約束というものを律法は否定するのか。決してそうではない。始めの約束——アブラハムが信じた、神がそれを受け入れられたという祝福——これと、途中で現れてきた律法というものと、いかなる関係にあるのか。もしも人を生かすべき律法を与えられたのであつたのなら、実に義とせられるには律法によるほかない。

22 されど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠めたり。これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与えられん為なり。

結局は、イエス・キリストに身を任せるしかないという、そのことがはっきりするために、途中でヘンテコな律法というものが介入して、人間のだめき加減というものを暴きたてた。パウロが言っているように、

「ああ、われ悩める人なるかな。誰がいったいこの私というものを、そういった罪の力、死の力、肉の力から解き放ってくれるのか。ああ、ありがたや、キリストさまが私をそういった呪いから贖い出して、私を新しい次元へと永遠に生かしてください」

という凱歌がローマ書第8章ですね。

23 信仰の出で来^{きた}らぬ前^{まへ}は、われら律法の下に守られて、この「信仰」というのはキリストに対する信仰ですよ。キリストに対する信仰というものが出てくる前は律法の下に守られて、

後に顕れんとする信仰の時まで閉じ籠められたり。

後に出てくる信仰に「身をゆだねる」と考えてください。このお方に身をゆだねる。このお方にすぎる。そういうことになる時までの中間状態だと。

24 かく信仰によりて我らの義とせられん為に、

この信仰によって我らは義とせられるために、キリストに身をゆだねる。身を任せることによって神様に受け入れていただくということがはっきりするために、あの律法というものは私たちがキリストへキリストへと導く役目をしてくれた水先案内人だった。律法がなかったら、本気で「キリストさま！」とは言えない。律法によって「もうだめだ」と徹



底的に示されてはじめて、「ああ、キリストさま！」と言える。これはパウロの体験ですから、そういうことになる。だから、律法というのは、そういう目的のための手段でしかない。キリストという方を際立たせるためのもの。キリストによる救いがどんなに凄いか。しかもそれは、キリストに身をゆだねるしかない。己の側には何も無い。そのことを徹底的に知らせるための手段として律法というものをお用いになった。律法自身は聖なるものだけでも、律法の受け手である人間がどんなにだめなやつかということを暴きたてる役目を律法がした。

24 かく信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。25 されど信仰の出で来りし後は、我等もはや守役の下に居らず。

信仰というご本体が出てくれた以上はもう守役は要らない。律法よサヨナラと。もう律法は役割を果たした。中間的なものはこれでもうお終い。

26 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。

イエス様に身を委ねることによって、キリストの中に抱かれて、そしてみんな神様の子である。

27 凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣たるなり。

キリストという新しい衣を着せられた。しばしば、エペソ書とかコロサイ書にも「新しき人を着よ。キリストを着よ」という言葉が出てきます。そしてもう、今はユダヤ人もギリシア人も、およそそういった人間的なものは関係ないんだということを次に言います。

28 今はユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。29 汝等もしキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循える世嗣たるなり。」(ガラテヤ3・19～29)

そして、ガラテヤ書2章に戻りますと、

「15 我らは生まれながらのユダヤ人にして、罪人なる異邦人にあらざれども、

ここに言う「罪人」というのは、「律法とは無縁なる者」ということ。我らは生まれながらのユダヤ人で異邦人とは違ふと。けれども、

16 人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。

ただキリスト・イエス様に身を委ねる。そういう信仰によるということを知っていて、キリスト・イエスを受け入れた、信じた。

これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰によりて義とせられん為なり。律法の行為によりては義とせらるる者一人だになし。

少しとばしまして、19節、

19 我は神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。

律法は私を殺した。律法によって死んだ。ローマ書7章に、



「律法に対して私のほうが死んだ。死んだ者を律法は縛れない」

とありました。律法によつて殺された。殺された結果、神様にまた生かしていただくことになった。神に生きんためにと。

²⁰我キリストと偕に十字架につけられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。

しかしながら、現実には自分の肉体というものは残っていますから、そこで、

今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

今われ肉体において生くるは、我を愛し我がために己が身を捨て給いし神の子を信じて——このお方に身を委ねて——生きているのである。「信ずる」より「身を委ねる」と言ったほうがいいでしょう。私は好きですよ、「身をゆだねる」というほうが。向こうにお任せする、よりかかる、抱^{いだ}いていただく。よっかかっていけば、抱いてくださいますものね。こういうお話で「信ずる」と言つたつて、私にはピンとこない。

それよりも、復活して生きていくくださるキリストが目の前に来てくださつて、そのお方に身をゆだねていく。そこで、抱^{いだ}き抱かれるという関係です。それによつて私は生きている。

²¹我は神の恩恵^{めぐみ}を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリスト

の死に給^{いたす}えるは徒然^{いたずら}なり。」(ガラテヤ2・15～21)

私は神様の恵みを空しくはしない。もし、神様に受け入れていただくということが律法の行為によるならば、では、キリストは無駄死にされたことになるではありませんかと。律法というものの呪いから我々は抜けられない。その苦しみをご自分の犠牲の死を通して回復してくださつた。だから、もうキリスト一点張りです。もう律法は要らない。律法よ、サヨナラ。そういうことを言つてます。

ですから、ローマ書をしっかりと受けとるためには、このガラテヤ書をしっかりと理解していただくということが必要になってきます。

●噫われ悩める人なるかな

そこでまたローマ書へ戻ります。ローマ書7章というやつかいな所をこれで潜り抜けました。7章24節、

「²⁴噫われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}より我を救はん者は誰ぞ。

「自分の中には二つの法則があつて、苦しんでいる。誰がいったいこの私の苦しみから解き放つてくれるんだ?」

ということと言つたのち、

²⁵我らの主イエス・キリストに頼^よりて神に感謝す、然れば我みずから心にて



は神の律法につかえ、内にては罪の法に事^{つか}うるなり。」(ロマ7・24～25)

我らの主イエス・キリストによつて神様に私は感謝する。私の実際というのは、心では神様の律法に仕える。肉、旧き我というものは罪の法則に仕える。こんな二重人格だけれども、もはや私はそれを問題としない。体が残っている以上は、そういうものがまだ残っているとしても、現実には残っているとしても、神様の次元では、神様のレベルでは、天の次元では私は死んでいるんだと。

ここをしつかり受けとつてほしい。「旧き我」はずっと生きてますから、相変わらず生きているように見える。けれども、目をあげて十字架を見る。天界に立っている十字架。そこで――さっきのガラテヤ書にもありますように、「われ主と共に十字架せられたり」と――あそこであなたの本質はもう死んでいる。現象面ではなお「旧き我」は残っていて生きているかもしれない。肉体も残っている。けれども、

「今この肉体を宿としながら生きているのは、私のために己が身を十字架に献げてくださった、そのお方に身を委ねてこそ私は生きている。その中に生きている私の本ものの私だ。体の中に今も生きているかのごとき私というのは、これはウソの私だ。こんなものにはもう囚われない」

そういう大転換を既になさつてくださっている。それは神様の次元でそうなんです。目に見える所では何も変わっていないように見える。そんなものに惑わされてはならない。そこなんです。よくクリスチャンの方が、

「私はキリストを信じて、喜びに満たされたけれども、何かいつしか喜びがなくなつてきて、相変わらず同じことをやって罪を犯して、うなだれている」

ということを教会でよく聞く。そうすると、牧師さんが

「悔い改めなさい。あなたの信仰が足りないからだ」

と言う。余計しょぼんとしてくる。そうじゃない。そんなものは放っておけ。旧き我はもう十字架で死んでいる。神様の目から見たとき、あなたは死人だ。そしてあなたは生きる人だ。旧き人は十字架に付けられて死んでいる。神様の目から見たら、あなたはキリストと一緒に復活して、神様の世界に生きている。それが本もののあなただ。それだけを問題にしていく。もう旧い我のことは忘れなさいと。

Oさんが10年前においでになって、それからよく私に言われるんです、

「自分はちつとも変わらない。相変わらず旧き我がいろんな悪いことをしでかす、自分の中で。どうしたらいいのか?」

「放っておけ。そんなものは放っておきなさい。そんなものは神様の目から見たら、もう消えて無くなっているんだから。こちらを見たとき、この旧い自分というのがどんなにいつまでもくらくらいついておつても、それは神様の目から見たら死んでいる。あなたは、神様の目から見たら、「新しい人に生きよ」ということを神様は



願っていらつしやるんだから、そんなものはもう放っておきなさい」
ということですよ。

●キリスト・イエスに在る生命の御霊の法

それでいよいよローマ書8章にきます。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、^{いのち}なんじを罪と死との法より解放し^{みたま}たればなり。^{のり}

もう断然たる宣言です。この一行をしつかり受けとっていただくだけで、本当に充分と言つていいくらいです。あとは理屈を言っている。「なぜそうであるか」という理を述べてますけれども、結論は、キリスト・イエスの中に在る者は、キリスト・イエスに身を寄せている者は——もつと言いますならば、キリスト・イエスに抱かれてある者は——キリスト・イエスのほうから近寄つてきて、そして我々を抱きしめて、

「ほら見てごらん。お前はもう十字架で旧いあなたは死んでいるんだ」

「えつ、そんなこと知りませんでした」

「それは知るはずもないよね、二千年も前のことだから。でも、あれは歴史的には二千年前だけれども、神様の世界においては「時」というものはない。永遠なんだ」

と。人間の知では、「あの時、あの場所で」ということは現実にあります。しかし、神様の次元では、それは無限です。過去・現在・未来を全部包み込んだ時間、時です。不思議なことです。

だから、アブラハムの約束からずっと1500年くらい経つていたんでしょうか。その間430年後に律法が与えられたという歴史的なことですけども。キリストが十字架の上で成し遂げてくださったこと、そして御力^みによつて新しい霊体となつて現れてきてくださったことは永遠なんです。常に現在なんです。そして、どんな時間的過去をも包み込んで、どんな時間的未来をも包み込んでいる。そういう神様の目から見れば常に現在なんです。二千年前も現在だし、今も現在だし、二千年後も現在でしょうし。常にそういうことで一切を包み込んでいる。

だから、この「キリスト・イエスに抱かれてある」ということは、もう罪というものから完全に解き放たれて、罪というものとは無縁の世界に入れられてしまっている。もう「審判^{さばき}」というものは終っている。コリント書の中に、

「人間に定まっていることは、必ず人は死ぬということ。死んだあとで、神様の審判の座に現れる。キリストの審判の座に現れる。この二つはいかなる人も逃れようがない」

と書いてある。ところが、そのうちの「審判」というほうはもう済んでいるんです、私た



ちは。先に終っている。キリストの十字架を蹴飛ばしている人間は、死んだのち必ず神様の聖座の前に現れて、自分について自己責任で申し開きをしなければならない。閻魔さんが出てくるのか、誰が出てくるのか知りませんが、必ず人が死んだのち神様の審判の前に現れることは逃れようがない。

なにか霊界を見てきた人も書いておられる。人間のずうっと生まれてから死ぬまでのことが全部バァーッと、走馬灯のように、絵巻物のように繰り広げられる。それは見ておられないそうですね、辛くて。マイナスばかりだから。見にくいことばかり出てくるから。それが全部記録されているということです。今だって、ビデオや何かで事細かに記録されたら消えませんか。神様の目から見たらそれが全部記録されているというんですよ、神様のビデオにね。それが死んだ時に、「はい、あなたの生涯はこうでしたね」と、ザァーッと心の中の思いが全部そこに映し出される。「どうですか?」「ああ、地獄に行くしかありません」と。そういうことですよ。

ところが、我々はもう無罪放免ですからね。地獄は全部、キリストが引き受けてくださった、十字架で。だから、我々は光輝く世界ヘスーッと入れられる。なんと有難いことでしょうかというわけです。これが、

「今やキリスト・イエスの中に在らしめられて在る者は」と小池先生は言われました。

「皆さん、ノホホンと勝手に在るなんて思ったらだめだよ。キリスト・イエスに在らしめられて在るんだ。すべてはキリストの側から出ているので、こつちのほうから威張って、キリストの中へ入りますなんていうものではないよ」

ということを仰いました。1978年のテープです。今それを新宿集会でずうつと聞いておられる。ローマ書です〔註:1978年1～12月の武蔵野幕屋日曜聖書講筵(ローマ書連続講筵)〕。これを是非お聞きになってください。文字化のプリントもお読みください。これはとってもいいですから。ちょうど、私はドイツへ行っていた時で、ドイツで聞かせていただきました。

²キリスト・イエスに在る^{いのち}生命の^{みたま}御霊の法は、なんじを罪と死との法より^{ときはな}解放したればなり。

キリスト・イエスに在らしめられて在る者は絶対に断罪されない。そしてキリスト・イエスの中に働いている「生命の御霊の法」——我々の中に働いていたのは「罪と死の法」だった。こつちの旧い我の中に生きているときは「罪と死の法」が働いていたけれども——今やキリスト・イエスの中に働いている生命の御霊の法はあなた方をあの罪と死の法から解放してしまったのであると。

これは、「絶対、そうなってしまったのである」という断定です。「そうなるであろう」ではない。「絶対、そうである。なってしまった」と。そのいわれは何かというと、私たちの



旧き自我、旧き我というものはどんなに立派な律法をいただいても、それを全うできない。律法は目的を達していない。せいぜい律法が言うことは、「お前は罪びとだ」という罪の宣告くらいしかできなかった。本来、律法は人を生かすために与えられた聖なるものであった。それが働きとしては、人を死へと導いていく、そんな反対の役割をしてしまった。そこから引っくり返しをしてくださったのが御子キリストである。それが、次に出てくるわけです。

³ 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は為し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。

我々の肉の弱さのゆえに、律法というものが達することができなかった事を神様が成し遂げてくださった。即ち、ご自身の御子をこの罪ある肉の形で——即ち旧き我、我々と同じ姿で——肉体をまとお遣わしになった。

これはガラテヤ書をみますと、4章4節、

「⁴されど時満ちるに及びては、神その御子^{つかわ}を遣し、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給えり。

時が満ちて、中間期間が過ぎて、神はその御子を遣わし、しかも、これを女より生まれしめ、マリアさんから生まれしめ、律法の下に生まれしめ給えり。即ち、我々と同じ境遇、同じ姿で送りこまれたというわけです。

⁵ これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。⁶ かく汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。⁷ されば最早なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣^{よつぎ}たるなり。」（ガラテヤ4:4～7）

これは律法の下にあつて呻吟している者を贖い、私たちをして子であること、御子と同じように神の子としていただくためである。げにそうしてくださった。だから、神様は御子の御霊を私たちの心に遣わして、「アバ、父よ」と呼ばしめ給う。さればもはや汝は僕奴隸ではない。子どもである。すでに子どもであるならば、また神の相続人である。ここに、「女より生まれしめ」とあり、しかも、「律法の下に生まれしめ」というところが非常に迫ってきます。我々と同じ姿をとられたということです。

それがローマ書8章の、

「³ 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は為し^な給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。」

己の御子を罪ある肉の形にて、この罪のゆえに、罪を処分するために、罪のために遣わし、そして、ご自身の御体において罪を断罪された。こういう表現で十字架のことを表しているわけです。目的は何かというと、我々は、主と共に十字架せられたり、そうすると、もはや旧き我に従って生きない。

⁴ これ肉に従わず靈に従いて歩む我らの中に、律法の義の完^まうせられん為な



り。

肉に従わず霊に従って歩む、そういう私たちの中に生命の御霊の法が働きますと、律法が求めていた以上のことがそこに成就していくという。律法の義が全うされるために——結局、律法も神の御意の現れですから、神様を一切とする行き方ですね——キリストが生きられたそういう行き方ができるようになる。

やはりアブラハムという人は偉いですよね、「イサクを献げろ」と言われたでしょ——あの時に、私はあそこが一番アブラハムの素晴らしいところだと思う——無理な相談なんですよね。もう待ちに待って与えられた独子^{ひとりご}、これがいなくなったら、彼の家は途絶えてしまはずなんです。その「イサクを献げろ」という目茶苦茶な命令が下った。それに対して一言も文句を言わない。誰にも相談しない。黙って、子どもにも言わない。

「これから犠牲を献げに行く。息子よ、一緒に行こうね」

と、トボトボ歩いて行くわけですよ。これはアブラハムの心の中はどんなんでしょうか。「これこれしかじかの理由で」と、説明してくださっていないんですものね。何も説明なしに、「イサクを献げろ」と言う。それは辛い。「外へ出てごらん、星を数えてごらん」と。それくらいは「はっはあ」と言えるけれど、「イサクを献げろ、屠^{ほふ}れ」と。それに対して、「なぜですか」と何も聖書には出ていない。だから、黙って子どもと一緒に歩いて行つた。あれはすごいです。

「霊に従って歩く」というのは、そういうふうな従い方です。「なぜですか?」とか、「こうすればどうなるんですか?」とか、いろんなことをゴチャゴチャ聞かない。キリストが私において賜るものはすべて善になる。すべて素晴らしい。私にはわからなくても、キリストは常に最善をなしてくださっている。生命を捨ててくださった方が変なことをご計画になるはずがない。

私たちの拠り所は常にそれですよ。わがために自らをお捨てになって、自らを犠牲となつて私たちに生命を与えようとしていらつしやるお方が、私たちを変なところに連れて行くはずがない。どんな力も、どんな邪魔者もキリストは蹴飛ばして、目的通り、御意^{みこころ}通り、私たちをキリストと同じ姿に化していく。それが私たちの最終目的なんです。大事業をすることでもありません。長生きすることでもありません。キリストと同じ栄光の姿に化せられる。それが私たちの最終目的です。

「キリストを衣^きよ」

と言いますね。「主と共に歩む」というのはそういうことなんです。二人三脚どころではない。もう合体、一つなんです。本当に子どもさんを大事に思っている親御さんにはその気持ちがきつと分かると思います。

「この子とは運命共同体だ。この子と一緒に生き、一緒に死ぬ」

という気持ちがきつとおありだと思います。キリストは全く聞いてくださっている、



「この子を生かす。この者を生かす。兄弟姉妹である」

と。キリストが嫡子でしょ、我々は次男、三男という、「キリストの共同の相続人」と言われてましょ。ですから、

「御子^{みこ}を惜しまずして下さったお方が御子のみならず万物を賜らざらんや」

という。このように、神様がキリストを通して成し遂げてくださったということはもう、

「目いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心に思いも浮かばなかったことを神は

成し遂げたまえり」

と、それなんです。だから、驚いてください。驚かなければウソですよ。

「キリストが死んでくださったって、十字架で私は救われました。ハレルヤ。サヨナラ」

なんて、とんでもない（笑）。これでは単にお経を唱えているだけです。そうじゃない。本
当に行じてなければ。キリストわがうちに生き給うなりと。事実そうです。キリストが私
のうちに生きてくださる。あなたの中に生きてくださっている。だから、みな兄弟姉妹で
ある。現実なんです。それをリアルに生き抜いていく。これが我々の歩みなんです。

それは一人ではあぶない。この世の中は多勢に無勢というか、ほとんどはそういう世界
を知らないでしょ。その中に生きるということは非常に厳しいことです。

チリの鉱山落盤事故が最近話題になっていますね（チリ共和国のサンホセ鉱山にて、現地時間
2010年8月5日に発生した坑道の崩落事故。崩落により33名の男性鉱山作業員が閉じ込められるも、
事故から69日後に全員が救出された）。69日間、団結して、素晴らしいリーダーがいて、それが人々
をまとめあげて、きちつとやっていった。あれが一人一人バラバラだったら、とてもじゃない、
いけないと思う。全くもう死の世界です、生命のない世界です。その中で、まあ信仰も強かつ
たのかも知れませんが、それで生き抜いた。

私たちもこの地上で生きているときは別世界なんです。地上の世界というのは、旧き我
がのさばっている世界なんです、これが讃えられている世界です、自己責任ですから。幸
福追求権でしょ。すべて「自己を犠牲にして」なんてとんでもない。すべてこの旧い我が
そのまま拡大していつて大きくなっていつて、「大きいことはいいことだ」ということで、
小さいものはどんどん踏みつぶしていくという、そういう世界なんです、この世はどん
なにもがいてみても。この旧き我が延長上の世界、それが自然を破壊し、さまざまなマイ
ナスをもたらしています。このままいつたら、絶対に地球はつぶれてしまいます。それは
全部、旧き我がら出てきていると私は思う。

そういうものが当然とされている。その中で「少しは善いことをしようね」と、いろ
んなことをやっている。それもいいですよ、ボランティア活動なり、そういうマイナスの
世界の中で、少しでもまともなことをしようという志は貴いんですけれども、結局、それ
が究極的な救いには至らない。



●御霊の愛

こちらの新しい世界、これはもう地上の次元を越えた世界ですから、

「天地は亡びる。されどわが言葉は亡びることなし。天地は過ぎゆかん、されど」

という。「天体は焼け崩れる」とか、いろんなことが言われてますね。黙示録だってそうです。決してこの地上のものがそのまま天国的な世界へ変貌するとか、変化していくとは言っていない。

「この地上ではあなた方は悩みがある。いろんな苦しみがある。悲しみがある。

涙がある。されど、雄々しかれ、われ既に世に勝てり」

という。この世という旧き世界と、新しい——「人新たに生まれずば」という——あの新しい世界とは対立関係にある。対立関係にありながら、それがこの旧き世界を包んでいる。滅びを願っていない。それを包んで変貌してくれるもの、それは新たに生まれることによつて、一人一人の霊が新たに生まれなければ。だから、全体がコロッと変わるということとは、神様の世界ではない。一人一人が人格なんです。霊的人格なんです。十把一絡げとか——「マスコミ（マスコミュニケーション）」とは「マス」（不特定多数の人々）に伝えるのが「マスコミ」ですけれども——そんなのではなくて、一人一人の魂に呼びかけて、

「私はあなたのために死ぬ。あなたに生命を与えるためにこのような苦しみを負つ

た。わかつてくださいね。私と一緒に生きよう」

と。一人一人に神様のほうから下つてきている、近づいてきてくれている。我々が近づいて行くのではなくて、神様のほうから近づいてきて抱きしめてくださる。

「そんなことがあるんでしょうか？」

と、マリアさんが聞きましたね。

「あなたは身籠もつて、男の子を産む」

「そんなことがあり得るんでしょうか？」

と、訪れて来た天使に言った。キリストの場合は、近づいて来て抱きしめて、

「お前を天国へ連れて行きたい。お前は神の子だ」

「そんなことがあり得るんでしょうか？」

「あるんだ。私がやった。私がちゃんとやった」

と。それも自分勝手にやったのではない。御意に従つて、キリストはそれをやった。その御意はアブラハムの昔からずうつと歴史的に伝えられてきた。キリストは絶えず旧約聖書を引いておられます、特にイザヤ書53章とか。

「神様の聖旨に従つて私は自分を犠牲として献げる。人が私を十字架に付けるのではない。私は自ら捨てる」

と、ヨハネ伝10章に出ています。



「私は善き羊飼いだ。善き羊飼いは羊のために生命を捨てる。誰かが私から生命を奪うのではない。私は自ら捨てる。だから、神様は私を喜んでくださる」

そうはつきりとヨハネ伝で言っていらいっしやる。それを一人一人に解き明かして下さっている。それに本当に飢えた人間は変わらざるをえない。

自分に自信があるから、この世の栄光というものに恋い焦がれて、

「そんなキリストの道なんて、あるのかないのか分からないような、そんな頼りないものは嫌ですよ」

と言う人は来ませんわ。しかし、

「私にはこれしかありません」

という心の叫びを持っている者、それを義としてくださる。そういう心の叫びを持っている者には、それが来てくださっている。御言が近くにある。

私が受けとっている神様、キリスト様という方は、向こうから近づいてきて、失われた者を尋ねられて、そして失われた者に生命を与えてくださる。99匹を放っておいても、1匹を捜し求める。そしてその方を捕まえて、一緒になって泣いてくださる。生命をくださる。そういう素晴らしいお方です。私はもうその方以外に行く所はないんです。

その方は何と仰ったか。

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」

と。これがただ一つのいましめです。それしか仰らない。キリストに身をゆだねた人間は、キリストのことが大好きなのは当たり前でしょ。「キリストを愛する」と言ったら、どうすることが「愛する」ことなのか分からないでしょ。

「御言を守りなさい」

と言う。御言、誡命、これが

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。人その友のために己の生命を献げる。これより大いなる愛はなし」

と。自分を——友ではなく——敵のために、敵のような我々のために生命を差し出した。そうしたら、兄弟姉妹、隣人を愛せざるを得ない。これは御霊の働きです。旧き我からは出てこない。旧き我は自分を大事にしますからね、「愛」と言ったら結局、自分のための愛です。けれども、御霊の愛——新しく生まれたその人の愛というのは御霊の愛——これは与えるほうばかりですね。与えてやまない愛です。

「その中に生かしてあげる、その中に生きていくなら、あなたは生命の中にある。しかし、旧い自分に舞い戻っていたら、それは死ぬしかないよ」

という、そのことがこの8章に出てくるわけです。



●御霊の人

「⁵肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

⁶肉の念は死なり、霊の念は生命なり、平安なり。

「肉の念^{おもい}」というのは「旧き我」ということ。旧き私の思いは死である。霊の思い、新しい賜りたる我、御霊の中に生きる我、御霊の実を結んでいる、これは生命であり平安である。よく申しますように、私はなぜ自分が新しくせられてあるか、なぜ御霊の人として皆さんの前に告白できるか、これはいつも平安があるからなんです。異言が迸ったり、預言が与えられているわけでもありません。その他、手を^お按げばサツとたちどころに病の人が癒されるという癒しの賜物をいただいているわけでもありません。いわゆるいろんな賜物はほとんど自分にはないと思っています。

けれども、何時も私の心の中には平安がある。どんな状況でも、いつも主さまに身をゆだねて生きていく。そのような生き方を貫いています。貫かせていただいています。これが御霊の働きでなくて何だろうか。旧き私はオタオタと終る。思い煩い多き私、悩み多き私。人が何とも思わないことでも悩んでいる。先々のことをいろいろ心配したりする。けれどももう今は、キリストが私と一緒にいてくださる。御霊と一緒にいてくださる。私が祈れなくとも、御霊が祈ってください。そういうローマ書8章に出てきていることは全部そのままではまるように変えられてしまいました。だから、現象面では何もなくても大丈夫。

⁶肉の念は死なり、霊の念は生命なり、平安なり。⁷肉の念は神に逆う、それ

は神の律法に^{おきて}服^{したが}わず、否したがうこと能わず、⁸また肉に居る者は神を悦ば

すこと能わざるなり。

肉の思いは神様に逆らう。それはもう神様の聖旨に従うことができない。そして、そういう旧き我にある間は、神様は喜んでくださらない。

⁹然れど神の御霊^{みたま}なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、

しかし、御霊があなたのうちに宿っている以上は、あなたはもう神のもの、あなたは霊の人だと。皆さんも、どうぞ、そう仰ってください、

「私は霊の人ですよ、御霊が宿ってくださいっていますから」

と、はつきりと言ってくださいね。ちよつと始めは勇気が要りますよ。

「お前ぐらいが何でやねん!」

と、こう言われます。本当です、勇気が要りますよ、言葉は取り消せませんからね。そこを断言すれば、キリストは喜ばれます、

「よし、よく言った。お前のために私は盾になる、防波堤になる」

と。人々から、

「お前は相変わらず旧き人間みたいな格好をしているではないか」

とか、いろんなことを言われても、キリストが立ちほだかくれる。それはそうでしょう、



子どもがいじめられたら、親が出てきますよ。キリストは出てきてくださいますよ。それにはやはり自分のほうから告げていかなければいけない。自分は言わないで、キリストが言ってください、これはだめです。自分がまずはつきり断言する。

「私は神のものです、キリストのものです。キリストは私を古い我から解放放つて、永遠の生命をくださった。御霊が住んでいてくださる」

と。聞いている人が、

「それは何一つ証明できないね」

と言いますよ。それはそうです。神様の世界は目に見える形で証明できません。それが神様の世界です。証明できるものは大したことない。

まあ、ノーベル賞なんかでいろいろ讃えられています。それは素晴らしいですよ。でも結局、神様の与え給うた自然界、自然の法則、それを新たに発見しているわけです。それをまた応用して、人の役に立つような薬を創ったり、物質を創ったり、いろいろ貢献している。そういうことだと思う。でも、そもそも法則というのは神様の他に考えられないと思う。法則を無視した神様なら、人間はあぶなくて何もできないでしょう。けれども、物理法則は変わらない。変わっているように見えても、別の法則が働いてそうなっているという。結局、法則の世界なんです。自然界も、自然法則という法の世界でしょ。神様の世界も法の世界なんです。

これは「生命の御霊の法」という法の世界です。それと、「罪と死の法」というのが戦っているわけですね。キリストがおいでになるまでは、「罪と死の法」が人間を苦しめていた。王として君臨していた。ところが、「生命の御霊の法」が現れて、「罪と死の法」は姿を消していく。

そういうことから、皆さん、はつきり。そして、その根拠は何か。

「御言がそう告げています」

と、そう仰ってください。私の思いではない。私の感覚がそう言わしめるのではない。御言がそう告げています。御言は本当です。キリストは生命を捨てて、生命賭けで御言を実証してくださっています。

私は神学者でもない、聖書学者でもない。何者でもありません。ギリシア語もヘブライ語も読めません。せいぜい日本語と、ときおり英語と、ときおりドイツ語と、そんなものを照らし合ったりしますけれども、本当の意味の専門家ではありません。それでいながら、ここでもこんなお話して、聖書を解き明かすということをしております。その根拠は、御言・御霊が私を導いていらつしやるという、そういう確信なんです。そして現に、私のお話を聞いて、幾人もの方が新しい世界に導かれていらつしやるという事実があります。

「今まで体験しなかった平安の中にあります。喜びがあります」

という報告が私の所にもたらされるわけです。そうすると、「ああ良かったんだな」と。自



分は何も自覚がありませんから。特別集会でも何でも、あとからいろんな反応が入ってきて、「ああそうなのか。やはり良かったんだな」と。そうですよ、自分は何も自覚症状がないということは。

ただ私は、キリストさまと皆さんをつなぐパイプです。私という人間が表に出てはいかん。キリストさまご自身が、御霊ご自身が皆さんの中に宿ってくださって、皆さん一人一人を御霊が導きたもう。御霊が導いてくださる。だから、あまり「先生」という、真ん中に立つ人が尊敬されたり、崇められたらまずい。「先生」があまりでかい顔していたらまずいですよ、「先生」はいつも消えているほうがいいわけです。私はそう思います。

9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、

「神の御霊」と言おうと、「キリストの御霊」と言おうと、「聖霊」と言おうと、みな一緒ですから。御霊があなたの方の中に宿ってくださっている以上は、あなた方は「肉」に、「旧き我」に居るのではない。「新しい我」を賜って、その中に居るんだから、「霊」に在る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

キリストの御霊を持ってない人はクリスチャンとは言えないよと。

「クリスチャンとは何ですか。キリストの御霊を抱いている人だ」

と。こういうことです。

とばして14節に参ります。

14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

と言ってましょ。だから、簡単なんです。神の子とは何か。神の霊をいただいている者。キリスト者とは何か。キリストの霊をいただいている者。もはや、「信じている」とか、「信じていない」とか、そういうことは消えてましょ。だから、「見える姿では何？」と聞かれたら、「身をゆだねている者」と答えたい。よっかって抱かれている者。抱きしめられている者。そういうふうに皆さんもお考えになりますと無理がないと思います。

その御霊のキリストが居てくださるならば——身体は病気だとかいろんなことで結局は亡びるけれども——

「その亡びるはずの肉体、土に還る肉体を、神様は変えてくださるよ」

というのが次に約束されている。これは物凄い励ましです。死に至る病というものだって、神様は御霊によつて——永遠にとは言いません、人間はどうせ125年位を限度として死ぬんですから、これはもうしょうがないけれども——死に至る病を仮に宣告されたとしても、それが普通の医学的な推論で「あと何年まででしょうね」と言われるものをはるかに越えて、生き生きと生きるというのにはあり得ることです。そうでなければおかしいとさえ私は思います。だから、決して医学で「こうだ」と言われたからもうそれでお終いと思つたら、キリストさまに対して申し訳ない。医学では、限度はこう言っているけれども、

「主さまは生命の君です。あなたは生命の御霊の法の中に私を生かしてくさる」



と。そういうお方ですので。医学は一応、旧き我というものを前提にして、その旧き我の体というのは統計的に、実験的にみて、この程度だということを言っているだけなんです。

「生命の御霊の法が働いている人は、死ぬべき体をも生かし給う」

とある。だから、最高齢までいくかも知れませんが。そのくらいの気持ちになる。

しかし、我々は生死というものの、肉体の生死に執着しない。

「生くるも主のため、死するも主のため、主に在りて」

と。「死ぬ」ということは私たちには、

「キリストのところへ行く」

ということですからね、願わしいことなんです。こんな煩わしい世の中で苦勞するよりも、よつぽど向こうへ行くほうが楽です、幸せです。けれども、そう簡単に逝ってもらっては困る。地上でやるべきことを皆さんは持っている。皆がサッサッと向こうへ行ったら、この地上は捨てられてしまいます。新しい生き方を賜った者は、キリスト様・神様が「おいで」と仰るまでは、この地上で果たすべき責任がある。それを忘れてもらつたら困る。自分の幸福追求権ではない。そうではなくて、神様のために生きる。神様のために生きるということは、この世で呻吟している、旧き我の中で呻吟している、呪いの運命の中にいる人たちにこの生命の福音を伝える。そして、その人たちを生き返らせるという仕事のために私たちはこの世に置かれている。……

本ものに触れれば、本ものを伝えざるを得ないという、そういう情熱が湧いてくる。なにも義務で、「こうしないとけません」というのではなくて、止むに止まれずそうせざるを得ないという生き方です。そういう方は若いです、非常に気持ちが若くて、生き生きとしている。

●御霊なんじらの中に宿り給わば

この8章10節にありますように、

10 若しキリスト汝らに在^{いま}さば、体は罪によりて死にたる者なれど、霊は義に

よりて生命に在らん。

御霊のキリストがあなたの方の中にいてくださるならば、体は罪のゆえに死んだ者だけれども——一応は死ぬ、しかしながら——霊は新しい生命の中にある。それだけではない。さらにプラスして、

11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給

わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿

りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活し給わん。

この御霊が宿っていてくださるならば、この御霊によって死ぬべき体をも生かしてください。自然法則からしたら「死ぬべき体」も、生命の御霊の法はそれを乗り越えて、生かし



てくださる。

私は、小池先生もそうだったと思うんですよ。あの方はお亡くなりになって、お医者の方仰るには、いろんなご病気をかかえておられたようですね。脳梗塞だとか、癌だとか、そういうものがかかえておられた。ご自分は全然気づいておられない。はたから見ても、よくそういったものを乗り越えて生きてこられたなと思うような生き方でした。でも、92歳まででした。先生にとつては不満足でしょうね、

「百歳を突破する。やるべき仕事がある」

と言っておられたから、不満足だと思えますけれども。医学的にいつたら、死んでいる体を生かしていただいていたらいいな。そう思います。

だから、我々はみんなそれぞれ、体というのは先祖から受け継いでいますから、いろいろさまざまなマイナス要因をかかえこんでいる。そういうレベルだけで見たら、みな逃られない何かに閉じ込められているはずなんですけれども、さつきから申していますように、この旧き次元の我というものをキリストは抹消して、新しい生命に生きる生命を賜っていますから、使命がある間は召されない。使命を果たしたら、「さあおいで」と言ってくださる。使命を果たさないうちに行ったら恥ずかしい。そうですよ。

「使命」ということを言いますときに、「伝道」だけが使命かというと、決してそうではない。キリストに在って為す学問、キリストに在ってなす人への奉仕、キリストに在ってなすあなた方の日常生活、これは全部、祝福されますから。皆さんそれぞれに仕事をいただいているわけです。仕事がある。それは神様から全部いただいているわけです。学者は学者として、お医者さんはお医者さんとして、みなさまざまな仕事をいただいているわけです。

検察官は検察官として。ところが、その検察官がここ（旧き我、罪と死の法）にいらつしやつたばかりに、ああいう変なことになってしまった。そうとしか思えない。もし、あの方がこの「生命の御霊の世界」へ来ていたら絶対にあんなことになっていない。これはどの職業でも言えると思う。段々、注目されだしますと、この仕事は守らなければいかんと、更に上へ行くこうとする。そうすると、そこへ変なものが忍び寄ってくる。何かそういう法則が働いているのではないかと思う。「検察の制度がけしからん」とか、そんなのではない。結局、それを担っている人たちが旧き己の中に生きて、そしてそれが自己拡大していくと、どの世界でも、政治の世界であろうと、医学の世界であろうと、学者の世界であろうと、裁判の世界であろうと、みなそうだと思う。家庭だってそうでしょ、親族関係もそうでしょ、夫婦もそうでしょ。みんな旧き我がのさばりますと、そこでマイナスのことが現れてくるわけです。しかしながら、この「生命の御霊の法」は、旧き我が葬られている世界ですから、神様の聖旨が生きている世界ですから、そうしますと、学問であれ何であれみな祝福される。人からどう評価されるかはどうでもいい。御名に在ってなされたことはすべて祝福される。そのことだけは信じてください。



12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活
くべきにあらず。13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて
体の行為を殺さば活くべし。

だから、私たちは責任を負っている。私たちは責任ある身だけれども、肉に従って生きる、旧き我に従って生きるなんて、そんな責任は持っていない。そんなことをやっていたら、死ぬだけだ。この霊、新しい御霊をいただいた、この御霊と一つとなつて生きる、そういう霊に主導権を与えて、体が時々変なことを求めてきても、それができないように体の行為を殺す。そしたら、あなたは生きる。

14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。15 汝らは再び懼れを懐く
ために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之に
よりて我らはアバ父と呼ぶなり。

その神の霊は懼れを懐かせる霊ではない。平安の霊、主を慕う霊。「アバ、父よ」と呼ぶ霊である。

16 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。

御霊が証明してくださる。御霊が「お前は大丈夫だよ」と言ってくださる。

17 もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。

これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

世継ぎであるならば、神の世継ぎにしてキリストと共同の相続人である。栄光も受けるし、苦難も共にする。

●御霊の執り成し

それから、18節からはちよつと変わりますね。18節からは自然の姿、自然界の弱肉強食というのがある。自然界自身が亡びてしまう。呻吟している。そういう自然界の嘆きの声をパウロは聞いている。ヨーロッパではよく、

「人が自然を征服して、それを人間のために使う」

なんていう科学思想が現れたようだけれども、パウロは決してそんなことを言っていない。自然は呻いている。呻きの源は何か。我々人間が罪を犯した、そこに根本原因がある。人が失われた姿で生きている。自然も同じ運命に服してしまった。しかも、自然が自ら望んだのではない。「服せしめ給いし者の御意による」とここにある。

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は、切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願ひによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。

造られたるものが虚無に服したのは、己が願ひによるにあらず、服せしめ給いし者による。



それも神様の御意の中にあつたという。人間が罪を犯して、旧き我の中に生きるようになった。神様を捨てた。そうするとこの自然もまた亡びの中にある。運命共同体とされてしまった。そうすると今度は、新しい新人類と言いましようか、新しい姿の人が生まれることによって、自然もまた生まれ変わることができると、そういうことをこの18節から言っているわけです。

21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの
光栄の自由に入る望は存れり。^{のぞみ} 22 我らは知る、すべて造られたるものの今に
至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

自然界の呻きを聞いている。いや自然界だけではない。我々だってそうだと。なるほど霊は新しくされた。この神様の次元に新しき我が生きている。しかし今、体はなお残っている。体がすっかり贖われて、新しい霊体を賜った時に、本当の完成のものが成り立つんだということを言うわけです。

23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせ
られんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。^{はじめ}
^{からだ}
^{あがな}

霊は贖われた。しかし、体は元のままである。この体が贖われて、あのキリストの栄光の御姿の、そういう霊体をいただくという、それを私たちの望みとしている。これは望みなのであつて、まだ成就していない。だから、忍耐しても当然なんだというふうに言ってます。

24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見ると
ころを争でな^{いか}お望まんや。^{のぞみ} 25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて
之を待たん。

眼に見える望みは望みにあらず。見えているところを望む必要はないではないか。見ていない、しかしそれを現実として受けとつていくというならば、忍耐をもつて待つんだと。

それから、26節にいきます。私の本当に好きなところはこの26節からなんです。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知
らざれども、御霊みずから言い難き^{よわき}歎^{なげき}（呻き）をもて執成し給う。^{とりな}

この「歎」というのは「呻き」ということ、本当の意味ではそうですね。私たちはどう祈っているのか分からないけれども、御霊ご自身が言い難い呻きをもつて執り成して下さる。そのように、「斯くのごとく」、御霊が私たちの弱さを助けて下さる。これが非常に私にとって慰めですね。人間というのは——まあ、皆さんは知りませんよ——私はだめなやつですので、そんなに模範的に祈り深い人ではない。祈り心はありますよ。でも、長い時間祈りに専念するとか、食事忘れて祈っておるとか、断食して祈るとか、そういうことをやったことがない人間なんです、申し訳ないことに。非宗教的人間なんです、俗物なんです。けれども、

「御霊みずから言い難い呻きをもつて執成してください」



御霊はこういう私の弱さを知って祈っていてくださる。そして、その御霊の思いを天界のキリスト様、そして天の父なる神様はちゃんとご存知です。御霊というのはやはりキリストの分身——キリストは天界にいらつしやいますけれども——天界にいらつしやるキリストの分身、あるいは分霊、これが御霊のキリストだと思う。

ちょうど太陽が一つありますね。太陽光線というのはビームです。太陽光線は一人一人に来て、暖めてくれます。太陽光線は太陽自身ではない。しかし、太陽とは無縁ではない。太陽の働きなんです、比喩的にいえば。

だから、天界にいらつしやるキリストがご自分の霊を我々の中に注ぎ込んで、霊となつて宿ってくださっている。「私は同質だよ」と、天界のキリストとこの御霊、あなたに宿つていらつしやるキリストという方は同じなんだ。天界のキリストは——一人格でしようか、一霊格でしようか、霊なる存在として——黙示録にありますように、神の御座にあつて羔の姿でいらつしやる。そのお方が我々の中に具体的に分身、分霊となつて、一人一人の中に宿つてくださる。そばにくつついてくださる。そして、私たちの霊いつも合体してくださっている。私たちの霊は祈らなくても、御霊の主は一生懸命に祈っていてくださる。私はハッと気がついたら、

「ああ、御霊が祈ってくださっているんだ。私も祈らなくてはいかん」と。

そういうふうにして、御霊の祈りに我々も沿つていくんです。我々が主導権をもつて、御霊をいただくのではなくて、御霊の祈りに私たちが目覚めてついていく。そういうことです、私の行き方は。私は威張らない、絶対に威張らない。威張りつこないですよ。でも、本当に御霊はそうようにして、私ごとき人間のために祈ってくださっている。ああ有難い。そして、人の心を清めてくださるでしょ。その御霊の思いをちゃんと知っていてくださる。

我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎なげき(呻き)をもて執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念おもひをも知りたもう。

御霊は神の御意みこころに適かないて聖徒のために執成し給えばなり。

御霊は神の御意に適つて執り成してくださる。神の御意というのは、我々にはわからない。でも、御霊は御意を知つたうえで、我々を執成し祈つて、善かれと思うことを祈ってくださっている。

²⁸神を愛する者、すなわち御旨みむねによりて召されたる者の為には、凡てのこと相働あはきて益となるを我らは知る。

だから、我々にとつては、すべてのことが相働きて益となる。一切のことがプラスに転じていく。どんなにマイナスに見えるような状態が襲つてきても、現にどんなにマイナスのような状態の中に自分が放り込まれていても、この御霊というお方が祈り執成し、そして、神様のほうでご存知である以上は、一切のことがそれぞれ働き合つてプラスになる。

だから、本当の楽天家です。すべて善いようにしかいかない。どんなに引っくり返つて



もいよいよなるんだと、そういうことを心から信じていける人は、自然と心が明るくなります。ふさぎこんでいたらいかん。絶えず胸を張って、太陽に向かって進んで行く。太陽は天界のキリスト様で、その方の光を受けながら、御霊に導かれて天への旅路を歩んで行く。身は地上を歩いていても、心は天界を歩いています、という気持ちでね。

「バカじゃなからうか」

「はい、バカでございます」

と。みんなバカだと、ちゃんとコリント書に出てくる。

「神は愚かなる者を立て上げて、賢者、賢い者を貶め給う」おとし

とちゃんと書いてありますよ。だから、

「よく、バカと言つてくださいました。はい、私はオバカさんですよ、悪かったです。すね。あなたはどんなに賢いのですか？」

と、開き直る。喧嘩腰ですよ(笑)。いや、言つてやるよ、

「お前さんね、天国へ行くという保証なんかあるのか？」

「いや、天国なんかないよ。死んだらみんなお終いだ」

「そうか。それならあなた、追悼会なんてみんな偽りだ。慰霊祭なんてみな偽りだ。

嘘つきだね」

と。そうでしょ。死んで何もなくなったら、何のための「黙祷しましょう」とか、「祈りを捧げましょう」とか、「慰霊祭をやりましょう」とかやるのは、みんな偽りでしょ、何もなかったら。でも、どんな無神論の人も、黙祷を捧げることはやりますものね、手を合わせたりしている。それは何をやっているの？ 偽善ではないですかと。

私たちはキリストに執り成しています。仏教の方でも、

「どうぞ、主さまの御胸に懷かれて平安でいらつしやるように」

と。決してお釈迦さまとキリストさまは向こうでは喧嘩していない。およそ善なるものを求めている宗教者はすべて向こうでは輝くはずですから。

「どうぞ、安らかにいてください。ご苦労さんでございました」

と、そういう執成しの気持ちで祈りますけれども。神様を否定している者は、偽善者ではないですか。そういうことを言ったら喧嘩になるから言わないけれども(笑)。でも、そうでしょ。ですから、私たちはバカでいいんです。

「賢い者を退けるために、愚かなる者を選び給えり」

とコリント書に出てきます。

●キリストに「お前、よくやったね!」と言つてほしい

そして、最後に凱歌が掲げてあります。

29 神は預^{あらか}じめ知^{かたち}りたもう者を御子の像に象^{かたど}らせんと預^{あらか}じめ定め給えり。これ



多くの兄弟のうちに、御子を嫡子^{ちやくし}たらせんが為なり。³⁰又その預じめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。³²己の御子を惜しまずして我ら衆^{すべて}のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。

神様が私たちの味方であつたら、いったい誰が敵対するのか。ご自身の御子を惜しまずに私たちすべてのために十字架にお渡くださった方は、御子を下さったのみならず、御子と共に万物をお添え物として私たちに賜るんだと。私たちが賜っている世界というものは凄惨な世界です。向こうの世界に行きましたら、凄惨なことになっている。

³³誰か神の選り給える者を訴えん、神は之を義とし給う。³⁴誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり。

いったい誰がこのクリスチャンたちを訴えるのか、審くのか。神様がもう既に義としてくださった、受け入れてくださった。死んで甦ってくださいだったキリスト・イエス様は神様の右にいまして、私たちのために執り成してください。サタンという霊が私たちの弱点をあげつらつて、「神様、こいつはこんなやつでだめなんですよ」といくら言つても、キリストはその前に立ちあはだかつて、

「私は彼を贖った。私の十字架で不足があるのか」と。これがキリストの強さですよ。

「十字架で足りないものがあるのなら、言ってみろ。この者を審くなら勝手に審け。しかし、私はこの者のために十字架にかかつて全部片付けた。あの地獄の死を味わってきた。そして、神様は甦らせて、素晴らしい栄光の姿で現れさせてくださった」

と。それはこの者が赦されていないならば、そんな姿ではない。復活ということは、もう贖いが終わったという、神様の証明なんです。キリストは、

「わがこと終りぬ。わが霊をゆだねます」

と、そこで終る。けれども、それから地獄へ行かれる。そこで苦しんでいる者を引き連れて、そして復活という姿で現れる。復活というのは、新しい霊の霊体をもつて現れる。今まで肉体とは別の姿で現れるということです。

そして、死体が変貌したのだと思いますね。我々の死体は墓に葬られますけれども、キリストの場合は、死体自身が変貌してしまつて、どこにもない。だから、いくらどこを捜したつて見つからないのは当たり前のことです。あれはキリストしか起こらないでしょうね。エリヤはそのまま天へ昇つて行つたと言うから、そうかも知れません。エノクもそのまま逝つたということが書いてあります。そういう極々例外的なお方を除いたら、みな土



から出たものは土に還る。しかしながら、別な体を賜って天へ昇っていく。そして、天界においてはもう絶対に審かれない。もうキリストが全部引き受けてくださったから。

それに文句を言う霊に対して、サタンであれ何であれ、キリストは、

「私の十字架で欠けたる所があるなら言ってみろ、足りない所があるのなら」

と。だからやはり、信者でもそうですよ。十字架で足りないところがあると思って、自分で付け足してみたり、

「自分はまだまだこの点が足りないから、これをしなければ完全に神様に受け入れられない」

と思うのは、これはさつきありましたように、

「今、肉にありて私が生きているのは、私を愛し私のために十字架にかかって死んでくださった、そのお方を信じるによつて生きているんだ。私は神の恵みを空しくしない。もしも神様が受け入れられるのに、自分の側から付け足すようなことが少しでもあるならば、それはキリストは無駄死にされたことになる」

と。キリスト自身は完璧な贖い主なんだから、もう付け加えることは一つもない。すべてが終った。「わがこと終りぬ」と仰った時にすべてが終った。だから、神様の目から見た時には、キリストにおいて全部もう贖いは成就したんです。あとは新天新地の完成だけが残っている。

私たちはこの地上を離れますと、まずキリストの御許へ引き寄せられて、そこで懷かれて、そこで天界に行きます。そののちに、新天新地というのが書かれています。どういう形で成就するのは我々にはわからない。私にとつては、それはどうでもいいことなんです。

私は、この地上を離れる時には直ちにキリストの御許へ行く。キリストが待ちうけてくださっている。そして、願わくば、

「お前、よくやったね!」

と、これを言っしてほしいんです、「お前はよくやった」と。皆さん、それを願ってください。パウロがそうでしょ、「褒美がほしい」と、ピリピ書で言ってます。「よくやったよ」と言われたい。始めは逆らっていたけれども、引っくり返されて、キリストのために誰よりもよく働いた。

「自分は月足らずで生まれたような半端物だけれども、働きにおいてはどんな人たちにも、ペテロにもヨハネにも誰にも負けない」

と、自負している。そして、

「私は主の証者だけれども、喜んでいる。私を待つのは義の冠だ。義の冠が待っている」

と。つまり「よくやった」と言ってもらえる。それに対して、私は後のものを忘れて、前に向かってひたむきに歩んで行くと。これは本当に素晴らしいですよ。それを歌ってい



るのが讃美歌の370番「めさめよわが魂」です。

●キリストへ丸投げ

そういうことで、クリスチャンはどんなときにも決してうつむかない、うなだれない。常に天に向かって生きていく。ペテロが波の上を知らずして歩いたように、キリスト様だけを見て行ったら、いつのまにか波の上を歩いているような歩き方になる。

この大変な難しい世の中で、クリスチャンがそれなりに生きていくというのは、これは奇蹟ですわ。本当にこの自己義認の、自己執着の、自我の拡大しているこの世の中で、クリスチャンがそれなりに地上の生活で責任を果していくということは、学者であれ、その他お医者さんであれ、さまざまの仕事場で、この新生した人間が生きていくというのは、決して生易しいことではない。あちこちでぶつかるかもしれない。時には、自分を押さえないければならないこともあるかもしれない。しかし、それらを全部、自分の責任でやるのではない。みんな任せる。おまかせです。それをやらないとノイローゼになる。鬱になりますよ、

「クリスチャンであるからこうせねばならない」

なんて、そういうストレスが嵩じますと鬱になります。牧師さんで鬱になられる方が多いそうですね。それはやはりこの開き直りでなさらないから。もう開き直ってね、

「私はキリストと一緒に生きている。ボロクソに言う人間は勝手にボロクソに言いたまえ」

と言うくらいに開き直って、責任は全部キリストがとってください。どんな失敗も全部キリストが責任をとってください。全部そこへ丸投げです。総理大臣が丸投げしたら困りますけれども。丸投げして、

「キリスト様が全部を引き受けてくださるんだ。その代わり御力をいただいたら、私はキリストのためには命を惜しまない」

と。この武士道みたいな、これがなければね。ただキリストの中に逃げ込んで、そこで小さくなって何もしない、これではだめですから。御力をいただいて、そして生き生きと生きていくという姿、これがやはり我々にとつての望ましい姿です。パウロさんがそのお手本を示してくれている。そんなふうに思います。

皆さん、きつと楽になられたでしょ。ローマ書は決して難しくはない。全部、自分たちの世界に引き込んで、自分たちの思いの中でこれを受けとっていけば、それでいい。アジアの人たちはアジアの人たちらしく、ヨーロッパの人はヨーロッパの人らしく、ということとで、この聖書を受けとっていきたい。「こうでなければならぬ」ということは一つもありませんから。それが「御霊の自由」ということです。御霊は私たちに自由をくださった。そういうことで、

「我々を囚われの世界から解放して自由を与えたまえり」



と、そういうことがガラテヤ書でも、またローマ書でもあとで出てきます。ローマ書というのは非常に理屈っぽいように見えますけれども、目的は、

「キリストがどんなに素晴らしい方であるか。キリストに懷かれて生きるという生き方がどんなに素晴らしい輝く生き方であるか。そして、この世の生き方とまるで違う。まるで違いながら、常に勝利していける生き方である」

ということを、確信をもって我々に語りかけてくれる。そういうパウロの生命のこもった言葉なんですね。それをキリストはバックアップしてくれる。キリストがバックアップしてくださる。そういうことで、皆さんもどうぞ、生き生きと生きてくださいますように。それでは終ることにいたします。

● 祈り

それでは短くお祈りいたします。

主さま、この静かな所であなたがローマ書を通して、またガラテヤ書を通して、あるいはヨハネ伝の御言から天の世界の消息をお語りくださって、ありがとうございます。

私たちは、見ゆる所にあらず、この見えないあなたの素晴らしい世界の中に身を置かせていただきました天国人でございます。

「御霊をいただいた者はこれ神の子なり」

天国人であると。どうぞ、天国人らしくいつも感謝と讃美と喜びをいただいて、あなたと共に歩んで行くことができますように。あなたの御意にかなう生き方を地上においてもなしていくことができますように、どうぞ、お力を賜りますように希こいねがいたてまつります。

また、病に苦しんでいる方々、肉体の弱っている方々を、どうぞ、力付けてください。あなたは一切に勝ち給う方であります。

「あなたの打たれた傷によりて既に病は癒されてあり」

と。主よ、あなたにあつてみな健やかです。どうぞ、この遺された肉体が病むことがあります。でも、御霊がそれを克服して新しい生命へと生かしてください。死すべき体をも生かしてくださいとお約束でございます。この御言をあなたが守ってくださいることを感謝いたします。

ここに集われた方々の上に、また集いたくても集うことのできなかつたお一人一人の上に、中に、どうぞ、お働きくださって、あなたの祝福が豊かにございますように、希い奉ります。

この祈りを御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。

